

(株) ナイスと社会福祉法人ヒューマンライツ福祉協会は、なにわ筋と鶴見橋商店街の「結節点」に、サテライト型特別養護老人ホームを合築した六階建てのマンションを建設中で、来年春には完成する予定である。アイビス・コートに続く高齢者支援付き住宅であるとともに、西成のまちづくりの懸案であったなにわ筋沿道の活性化構想の具現化でもある。したがって、介護を必要とするようになっても、西成に「住み続けられる」住宅であるとともに、若い人や働く人が西成に「住み始める」住宅であって欲しいと願っている。

実は、ボクは、この都市型賃貸住宅に一つの「企み」を付加できないかと思い描いているが、とりあえず「にしなり社宅構想」とでも名付けておこう。

例えば、ビルメンテナンス産業というのは、いわば「最賃産業」と化しており、時間給 800 円、月給にして 12 万円程度に止まっており、働いても実質生活保護費を下回りかねないものとなっている。この現状の根底に、公共サービス等の価格至上の入札制度があることは何度も訴えてきたところだ。先頃、大阪市の地下鉄清掃の総合評価入札において、時間給 1000 円、月給 17 万円で処遇するなら 100 点満点中 2 点を加点するという評価項目が設定されたが、一つの指標が示されたこと



会社の社ではなく、社会の社という「社宅」は夢？

と注目している。ただ、そう簡単に市場が反応するかは疑問だ。

ボクは、大阪市内においては、労働市場と賃貸住宅市場がミスマッチ現象を起こしており、12 万円と 17 万円の差額はちょうど家賃に匹敵すると思ってきた。そこで、ホームレスやニートなど就職困難者の就労支援においては、就職して定着する期間を 3 年程とし、その間は、家賃の半額の 2.5 万円程を、雇用主と住宅供給者と公共の 3 者が拠出することはできないものかと思い描いてきた。つまり、会社の「社」だけでなく、社会の「社」という意味の「社宅」である。これが委託公共サービスなら、直接の拠出はなくても、予定価格と落札価格の差を少しだけ縮めるだけで実現できるはずで、

総合評価入札に加味することは可能だと思ってきた。これなら、公共は、必要経費を市民に賃金として還元して生活保護から自立でき、会社は持続可能な労働力を確保でき、西成のような下町の賃貸住宅市場も活性化する、まさに「三方よし」になるのではないかと...

ともかく、ボクたちは、社会的企業という着想で、良質で適正で持続可能な賃貸住宅を幾つか供給してきたし、総合評価入札の導入など労働市場への介入も試みてきた。いわば、住宅市場と労働市場の「結節点」が「にしなり社宅構想」であると思っている。

(株) ナイス代表取締役 富田一幸





hidarimakiの  
この逸編  
泥の河



監督：小栗康平  
原作：宮本 輝  
キャスト：田村高廣  
藤田弓子  
加賀まりこ  
公開：1981年 VHS  
モノクロ 105min  
配給：東宝株式会社

「どっどど、どどうど、どどうど、どどう」。これは「風の又三郎」の冒頭である。僕が小学校の頃一人の転校生があった、すぐ友だちになれたけれど、ある日彼は再び転校していき姿を消した。突然あらわれそしてすぐに消えていった少年。それは賢治の「風の又三郎」みたく謎めいていた。映画「泥の河」を見た時もそれは又三郎に重なった。

昭和31年夏の大阪。社会が近代という足音を響かせ、古い時代を呑み込もうとしていた、まさにそのはざままで遭遇した“異邦人”たちとの、ほんの数日間の謎めいた出会いと別れ。「泥の河」は、主人公の少年が見た戦後を冷徹に描いた逸編であった。

素晴らしい作品だが、この映画で一点違和感があった。出演者すべては大阪弁を喋り大阪そのものだったが、ロケーションが大阪ではないと思ったことである。舞台となる地域は原作でも安治川寄りの中ノ島界隈だと描かれていた。しかし、全編を通じ河川の场景、町並みの風景、大阪がかもし出す匂いのようなものが映像からは伝わらなかった。後年、映画祭などに関わっていた頃、小栗監督に会う機会があって聞いて

みると、ロケ地は名古屋だと教えてくれた。この映画の製作は80年初頭なので、31年のイメージを残す場所などもう大阪には存在しなかったのだろう。おそらく大阪を知らない人にとってはどうでもいい問題が、僕には大阪の町の息づかいを知るだけに、映画の印象を少しばかり半減させてしまった。

もはや戦後ではないと喧伝され、経済の発展をめざす時代に突入しかけていた頃、大衆食堂の一人息子信雄は、仲のいい行商人の事故死や川魚漁師の水死を目撃する。また、戦地から命からがら帰国した男たちの死が続き、帰国後の苦勞が何であったのか、その解が持てぬ父親や大人を眺めつつ、ある日、少年は水上生活者で学校にも行けないきっちゃんという少年とその姉に出会う。水上生活者とは、陸での生活者が住まいを持たない漂泊者に対する蔑視言葉でもあった。僕も小学生の頃、その子弟が入学してくるといふ噂の中で、自分とは違う“異邦人”のような存在に不安と恐怖を感じたことがあった。

水上の姉弟は陸の生活者信雄たちと交流し心を開いていくが、ある時、信雄は彼らの母親がこの舟の中で身を売り稼いでいることを見てしまう。きい姉弟のいじらしさは、「郭舟（くるわぶね）」と呼ばれて蔑まれる漂泊者の内奥を切なく表現して見事だった。

そして陸と川との距離は遂に埋まらず、ある日突然の別れがくる。彼らの舟が曳航され上流に向かって収容されていく。船が岸から離れ少年は舟を追う。船はどんどん流されていく。少年はきいの名前を呼ぶ。いくつもの橋を抜け舟は走る。それでも少年は追っかける。しかし舟上に彼らは姿を見せず、遠ざかる舟の姿を残して映画は終る。社会の変化が小さな個人の存在を消し去っていく暗喩として、このシーンは白眉であった。

h i d a r i m a k i

